

休みの日には港の入江の奥にて「ワカサギ」を釣ってきて食べさせてくれました。彼は最後までここに残ってみんなの送還を見届けると言っていました。この方の名前をどうしても思い出せず、残念で仕方がありません。そして二十四年八月、初便の病院船「高砂丸」にて舞鶴港に入港、復員することができました。

帰還後も体調は思わしくなく、休養と社会復帰の準備として親戚の工場の手伝いをしながら体調を整えておりましたが、不運にも、満州鉱発の同僚は通産省に入省しておりながら、二十四年に公務員の定員制が敷かれて採用にはならず、たまたま明石市大久保のサンエナメル(株)(東洋製缶系)のうわ葉担当として「セラミック」の研究をしていましたが、不況のため二十九年夏倒産に遭い、路頭に迷うような状態になりました。幸い知人の紹介で二十九年十一月に大阪に進出して間もない大阪読売新聞に入社することになり、定年後も六十五歳まで勤務しましたが、人間万事塞翁が馬と申しますか、いろいろ勉強になり、よき人間関係が得られ、現在は多くのボランティアに老後を捧げられるよ

うになり、生きて帰れたことに感謝いたしている次第です。

## 遠いウズベクの地で

千葉県 内田 健次

終戦を鎮南浦で迎えた私たちは、悲憤やるかたない日々を送っていた。しかし特別仕事があるわけでなく、なす事のない空虚な日々が続いた。

十一月末、武装解除のため、前にいた平壤に集結のため自動車で輸送された。ここで鎮南浦へ行く組と三郷へ行く組とに分けられた。古参の憲兵たちは、朝鮮人たちに顔を知られているので鎮南浦へ帰るのを好まず、そこに残ったが、私は新参であり、あまり顔を知られていないので、鎮南浦に行く組に入った。

鎮南浦に着くと、そこにいた晝部隊は上陸用舟艇で日本に帰った後だった。乗って来た自動車は徴発したものでだったので返してしまっ、足がなくどうするこ

ともできなかった。

その当時は関東軍の家族が続々と南下して来ていたので、その中にもぐり込む者が多かった。私はもう一人の戦友と満鉄社員の、といっても役員だった人の、赤ん坊を連れて困っている奥さんのところへもぐり込んだ。米を二升買って持つて行った。奥さんは炊事ができないので私がやった。そうしている間にソ連軍が進駐して来て「日本人は全員集まれ」ということで集合させられた。大部分は関東軍の兵隊だった。私たちは後ろの方に立っていた。そこへ今まで日本人が使っていた朝鮮人の警察官が拳銃を持ってやって来て「憲兵は前に出ろ」と言った。古参の憲兵は顔を知られていたもので、すぐ見つけられて前へ出された。何回も行ったり来たりして「憲兵は前に出ろ」と繰り返した。最後には、前に一緒に仕事をしたことがあったじゃないかと私も見つかってしまい、結局十数人が前に出され、そして皮肉にも、今まで自分たちが勤務していた憲兵隊の留置場に留置される羽目になった。そこには二十日ほどいた。

夜中に起こされ「お前たちを安全なところへ移すから」と言い渡された。どこに移されるのかと不安に思っている、連れて行かれたところは警察の留置場であった。そこには、この地域の役職にあった日本人という日本人が集まっていた。会社関係、在郷軍人会、先生、警察官など全員いた。二人用の房に四十人ぐらい詰め込まれた。中には朝鮮人もいた。前に日本人にいじめられたといつて、今度は逆に悪態をつかれた。ここにも二十日ほどいた。

また夜中に起こされた。これで最後かと思った。今度は憲兵隊だけだった。連れて行かれたところは刑務所だった。ここでは食事で困った。ご飯は出るがおかずが出ない。米は国からの支給だからただであるが、おかずは支給にならない。お金を出せばその人には出すというので、終戦時に下ろして持っていた貯金を小刻みに使っておかずを出してもらった。そんな生活が四十日ほど続いた。

そのころから取調べが始まった。ソ連の取調官が朝鮮人の通訳を連れてきて取調べに当たった。取調べは

一人ずつ行われた。私の番になった。どうしたのかと聞かれ、今までのいきさつを話すと、朝鮮人の通訳が「もういい」と言う。自分にも都合が悪いことがあるからである。取調官自身日本語を知っているらしく、また今までの取調べで大体の様子をつかんでいるらしかった。取調べが済むと集められて三郷里の収容所に送られた。練兵場跡である。

ここではすることもなく、野球をやったり炊事用の薪取りをするくらいのものであった。薪取りには一般の日本人たちも来ていた。薪を取りに来る人たちのほかに死体を埋めに来る人もいたが、その人たちには穴を掘る力もなかった。食べ物をほとんど食っていないからである。何もすることがない、そんな生活が続いた。中には脱走する者もいたが、食べる物がなくて結局帰ってきた。最後に五人ほど逃げたが、三人帰ってきた。ソ連軍側は「見せしめ」のためと称して三人を銃殺刑に処した。その刑の執行には、各中隊から二名ずつの日本兵が立ち会わせられた。その三人の死は、日本人らしい立派な最期であったとのことであった。

その後、我々は興南に移動させられた。そこに集まった日本人は千人単位で移動して行った。私は員数外であったために足りないところに入れられた。入港する船はソ連から兵器を載せてきた。出て行くときには資材を積んで行った。陸路から入ってくる満鉄の貨車も同じであった。最後に、私たちの大隊は鉄道のレールまで外させられて船に積んだ。そんなことから、ソ連では物資が極端に不足しているのだと思った。

いよいよ船に乗せられることになった。ソ連側は逃げられることを心配して、日本へ帰すのだと言った。私は船がソ連船で日本へ帰るための船ではないと思っただが、仕方なく船に乗った。着いたのはナホトカであった。この港の近くで二カ月ほどテント生活をした。ここではよく使役に使われた。時には日本人の死体を埋葬する使役にも出された。ここでは水が悪く、沸かして飲むでも下痢をするほどだった。生水を飲むものなら下痢がひどく、飲むことは禁じられていたが、喉が渴くので隠れて飲む人もいて、栄養失調とも重なり死者が続出した。その死体は解剖に付され、その後、

かますに詰められるのであるが、その死体の埋葬であった。

私は、ドイツ軍の速射砲の手入れに行ったことがあつた。沢山の速射砲が並んでいた。私たちが使つたのは三七式山砲であつたが、連中のは四七式の最新式のものであつた。私は以前速射砲隊にいたので、砲に油を塗るのをやらされた。その間、水も飲めない、給食もよくない、ひどい生活が続いた。

そうしているうち、新たに一個大隊が編成され、汽車に乗せられた。汽車に乗つたものの、今度はなかなか走らない。一つの駅に三日も止まつている。また、車の中の水を飲むので下痢をする。私もとうとう下痢してしまい、断食しようやくとまつた。

三十日ぐらいたつたころ、汽車がとまつた。着いたところはモスクワではないかといううわさが立つた。走っているとき、汽車は西に向かつて走り続けていたので皆そう思い、モスクワで何をするのかと話し合つた。

どこから入つたか知らないが、とにかく着いたとこ

ろはウズベク共和国のタシケントというところであつた。着いて二、三日したら雑役に出された。そのころソ連の作業係が、酸素を扱える者がいるかというので、私はできると答えた。そうすると作業係は「明日からその仕事をやれ」と言うので、「どこへ行くのか」と聞いたが教えてくれなかつた。

翌朝、酸素屋である九州の山村という男と二人で現場へ行つた。行つてみたが道具がない。あつても誠にお粗末な物ばかりであつた。ノルマがあるのに能率が上がらない。カーバイドを使つても道具が悪いのでみんな逃げてしまう。日本では水を落とすと発生したガスがタンクの上部に溜まつているが、ソ連ではカーバイドが水につかりつばなしだからガスが出つ放しだつた。無駄なことだと思つた。

私たちは鉄材の切断が専門だつた。八十メートルがノルマだつた。そんな作業が続いていたある日、今日は何メートル切つたか計ってみようということになつて、計つてみると百二十メートル切つていた。監督は「オーチン・ハラショーだ」と言う。それでは何パー

セントくれるかと言うと、一一〇パーセントだと言う。正確に計算すれば一五〇パーセントになるはずだ。このときはどばからしいと思つたことはない。

私たちの作業場には監督が二人いた。一人は仕上げの監督であり、もう一人は生産の監督で、生産の監督はとても意地が悪かつた。仕上げの監督はひどく怒りつばい男だつた。怒つたときの様子が亀のようだったので、その監督のことを日本人は「亀」「亀」と呼んだ。亀のことをロシア語でチエルバーハと言うのであるが、本人は日本語の意味がわからないので一緒になつて「亀」「亀」と言つていた。そのうちにだれかがその意味を教えたらしく、カンカンになつて怒り出した。そして、私のノルマは三〇パーセントにされてしまった。宿舎に帰り労働係が、ノルマが低いから営倉だと言う。経緯を説明すると、初めてのことから今日は許すが今度は営倉だと言われた。

営倉は四方がコンクリートの壁で、床には水が溜まつていた。冬には気温が零下二五度ぐらいである。一部屋に二人ずつ入れられ、夜は寝せないといつた状態

であつたので、そんなことをされてはたまつたものではないと思つた。

私たちの監督はいい監督だつた。仕事がないときは外の仕事を回してくれるし、普通に仕事をしていれば百パーセントはくれた。

そのうち、鉄骨は出来上がり、現場に行くことになつた。素人の集まりで柱を立てるわけであるが、上に上る人がいない。上れる人は私と松本という男と見習士官の三人であつた。四本の柱を立てるに三人しかない。そこで監督が上ることになつた。

足場もなくワイヤーで吊つて上げている途中でワイヤーが外れて、五十センチぐらいの鉄骨が私の頭に当たつた。すぐ医務室へ行つたが、簡単な治療をしただけで宿舎にすぐ帰れと言われ、宿舎に帰ると作業係や所長たちが五、六人来て、守衛室に連れて行かれて「どうしてこうなつたのか」、「サボタージュではないか」と責められた。自分で落としたのではなく落とされたのだと状況を話したが、なかなかわかつてくれなかつたが、最終的には了解した。そして医務室で治療を受

けることになったが、何もなくヨーチンを塗って包帯を巻き替えただけで、休んでいろと言われ宿舎に帰った。

翌朝起きると物凄く頭が痛むので診断を受けに行ったら、熱を計れと言う。体温計を借りて計ったら平熱であった。熱がなかったら作業に行けと言う。どうしてかと聞くと「熱がないと休めないんだ」と軍医は言う。「じゃあ行くよ」と言って現場に出てみたものの、立っているだけでもおつくうでたまらない。監督に話すと、それでは休んでいろと言う。しかし、ここでは人目につくから上の見えないところで休めと言うので、上の方で休むことにした。間もなくカタンコトンと階段を上がってくる靴の音がする。上がってきたのは警戒兵であった。彼が何をしているのかと聞くので、体の具合が悪く監督に断って休んでいると説明し、監督も「日本人は仕事をしに来ているのだから仕事のこと俺が監督する、お前は警戒に来ているんだから仕事には口を出すな」と言ってくれた。この監督のおかげで一週間ほど現場で休ませてもらった。この監督には

大変お世話になった。

私たちは最初タシケントの第五收容所に收容され、その後第六收容所に移った。そこには前から関東軍の兵隊がいた。彼らは終戦直後からここに送られて来ていた。そのころは食糧事情が極めて悪く、食べ物がろくに支給されなかったと言っていた。我々が合流したころには彼らは大分よくなったと言っていたが、それでもお粗末で働く力の足しにはならないほどだった。黒パンが一人分四百グラムぐらい、そのほか冬はキャベツのスープが出たが、夏には馬鈴薯のスープが多かった。

この地方の寒さはそんなにこたえるほどではなかった。一冬零下二五度に下がったことは何日もなかった。我々のいたところは平地で雪は降らなかつた。そんなわけで軍隊時代の外套で寒さは十分防ぐことができた。作業は個人ノルマということで、一回目には給料をくれた。二回目には雑役だったのでパーセントが低く、八〇パーセントくらいだったので全然くれなかつた。そこで、品物は忘れたが、かつばらって売って、パン

を買って皆で分けたことを覚えていた。

そうしているうちに仕事がなくなり、小さな紡績工場に回された。図面の読める者がいるかと言うので「わかる」と言うと、「お前はこれをやれ」と図面を渡された。紡績工場の増築計画の図面であった。すでに柱は立っていて屋根を葺く仕事であった。中尉が隊長で、四十人ぐらいの人たちが行った。昼食は自分たちでつくするため食事係が一人付いて来た。そのほか、大工だというロシア人の少年が孤児院から働きに来ていたが、何もできない子供であった。

ある日、その少年が炊事場で捨てた砂糖大根の尻尾を拾って食うのを見た。なぜそんな物を食うのかと聞くと、その少年は「最近風邪を引いて仕事を休んだので食糧の支給が減らされ、腹がすいて仕方がないんだ」と言う。私たちはその少年にスープを分けてやることにした。この国では孤児院が完備しているし、養老院は完備しているというが、働かなければ食べられないなんておかしいなどと話し合った。

そのうちに共産主義運動が始まった。私はそれに反

発したが、大ぜいはそのうち運動の方向に傾いていった。

帰国が始まったのは二十二年ころであった。最初に帰ったのは三十人ぐらいで、O・K組（体が弱く休養している病弱者の組）の者であった。それに優秀作業員も五、六人帰国した。そんなわけで、入会すると帰国できるのではないかと考えた者が次々と入会した。そして収容所の日本人がほとんど全員入会した。

結局、それでは意味がないということで、入会は全部御破算となり、新たに作業から帰って来てから民主教育を受けることになった。軍隊時代に補充兵だった連中がこの運動に染まりやすかった。指導者だった者たちには、入隊前からその気のあった者もいたようだった。

作業から帰ってくると、疲れているのにマルクス・レーニン主義をおち込まれた。二回ほど反発したら反動だと言ってやたら吊るし上げられた。仕方なく、帰ったら承知しないぞと思いつつながら、しぶしぶ彼らの言いなりに従った。

こうした生活を送りながら、幸せにも私は昭和二十三年八月二十日、祖国の土を踏むことができた。

それにつけても、遠い異国で生活を共にしながら、異郷の地で散った多くの戦友の御霊のご冥福をお祈り申し上げます。合掌

## 尊い体験

福井県 佐々木 清左夫

福井県今立郡南中津山東庄境二十九号の十二番地、佐々木清左エ門の三男として生まれた。大正九年十二月二十九日誕生。家業は当時農業でした。昭和三年南中尋常高等小学校へ入学し、昭和十二年同校卒業す。家族構成は、祖母、そして父母、子供六人、合わせて九人の大家族でした。

私は昭和十二年四月、大阪市西成区栢通り佐々木硝子店に修業のため就職した。しかし、昭和十五年六月ここを退職して、翌七月、今度は満州一四八部隊、陸

軍燃料所へ軍属として就職す。

昭和二十年八月一日、赤紙召集を受け、即新京二八〇〇部隊へ入隊し、一四五部隊に配属となった。そして、輜重兵として勤務す。兵器は当時五人一組単位で、小銃一丁と手榴弾三個、それから馬一頭が配分された。八月十五日、ガンリン輸送途中、引揚げの命令が出た。即ヒターンして部隊に帰った。そうしたら、天皇陛下のお言葉がラジオで放送されると聞き、早速その言葉を耳にした。「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び」云々。

このとき日本の敗戦（終戦）を知った。その後、五時間ほど過ぎたころ、新京方面の郊外がもうもうと燃えているの見える。私はとっさに、証拠隠滅のため、とうとう兵舎に火を放したなと思った。紛れもなくそのころ軍の撤退が始まっていた。

当日の夜十時ごろだった。私たちの部隊の倉庫にはガンリンがたくさん蓄積されていたので、敵の侵入として付近の防火のため夜間立哨せよと命令が出た。入隊してわずか二週間足らずの我々に、そのうえ兵器も